

# 道根往還

どう

ね

おう

かん

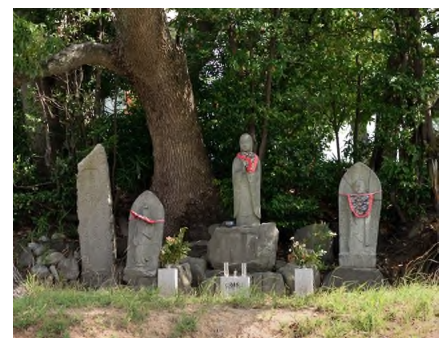


道根往還は、現在の東公園入口付近にあった「欠の三本木」の東から、鍛冶町にあった「鍛冶屋の五本松・馬頭観音」に至るまでの古道です。全長は約10km。高所・尾根（ドウネ）を通る道であったためこうした名称と呼ばれたものと考えられています。鍛冶屋より先は東三河や山間地域に通じるため、歴史的・経済的に重要な道路で、かなり古くから存在したものと想像されます。鎌倉時代においては足利氏の額田郡支配に、戦国時代には奥平勢の岡崎攻撃におけるルートとして重要な役割を果たしました。明治時代までは人馬の道として、主に炭・米・日用品の運搬に盛んに利用され、一日に百頭程の馬が往来しました。沿道には茶店が二軒あったことが知られています。明治25年に乙川沿いに県道ができて以後、馬の往来は次第に減りましたが、人の往来は昭和10年頃まで絶えませんでした。現在でも当時の面影をその道筋でたどることができます。（新編「岡崎市史」より）

※天正三年(1575年)の長篠の合戦の折、武田軍に囲まれた長篠城を脱出し、岡崎城の徳川家康へ援軍を求めた鳥居強右衛門（とりいすねえもん）も、この道を通ったと言われる。

## ① 欠の三本木

道根往還の起点。4/19～25までの浄専寺（福岡町）の蓮如忌には見世物小屋が建ち、植木屋や様々な店が出て大変な賑わいであった。道根往還も蓮如さんへ向かう人々が、鍛冶より東方からも大勢出かけたという。そのため、傘松(やすらぎ公園)の辺りにも屋台や露天商が出たという。浄専寺が元能見町へ移っても、蓮如さんには参詣する人が多かった。明治末～昭和初期、岩津の天神さんもかなりの賑わいであったので、道根往還には多くの人が歩いたという。





## ② 茶店跡

道根往還の途中には、明治のはじめ、二軒の茶店があった。一軒は、やすらぎ公園内にあった「傘松」の東に、もう一軒は、小呂池の南「虎石の大松」の前にあった。「傘松」の東にあった店は、「ウキさの店」といって親しまれていた。酌婦を2～3人おいて、馬方に酒を飲ませたり、飯を食べさせたりした。板田の忠さが「餅はいらんか。食うてごろうじろ。」と大声を張り上げていた、という。



## ③ 小呂池（通称「岡崎の大正池」）

池の中から枯れた木々が何本も天に向かって突き出し、長野県の上高地の大正池を想起させる幻想的な雰囲気が漂っている。梅雨時には、アジサイの花とともに、可憐なスイレンの花やハゴロモノの白い花が咲き乱れる。秋は、紅葉に彩られる。天気の良い日には釣り人がのんびりと糸を垂れている。



## ④ 高隆寺根本中堂跡

高隆寺の歴史は古く、創建の由来については定かでないが、一説には推古天皇の時、聖徳太子が寺号を与え、堂宇を建立したと伝えられている。後に、足利尊氏がさらに造営をして大伽藍となり、遠近の信仰を集めたが、室町時代末期に兵火に遭い、堂宇の大半を消失した。寺の根本中堂跡が今も残っており、その礎石（写真）や石段を見ることができる。



## ⑤ 南無阿弥陀仏の碑

南無阿弥陀仏の石碑、明治初期に建立されたといわれ、道中の安全を祈願したためとも、旅の途中で不幸にも病に倒れた人を供養したためとも、追いはぎの難に遭った人を弔い、旅人の無念を想って村人が刻んだとも、いわれている。また、この碑の真北に善光寺があるといわれている。（実際は、善光寺の真南は、静岡県藤枝市辺りになるので、この説は残念ながら誤りである）



## ⑥ 馬の背道

尾根道の両側が鋭利な刃物で削り取られたかのように、馬の背のようにやせ細っていることから、馬の背道と呼ばれている。昔は、道根往還沿いの田んぼで仕事をしていると、一日中、馬の鈴の音が絶えなかったという。狭い道中、お互いのすれ違いで困らないように、馬にはたくさんの鈴がつけられていた。鈴は音色のよいものを遠くからわざわざ取り寄せたという。



## ⑦ 石畳

悪天候の時、道がえぐれるのを防ぐ。各所に石畳があったと考えられる。また、この道を花嫁衣裳に高島田の花嫁が通ったこともあった。板田町の明治28年生まれの話によると「道は草ボコだから、花嫁衣裳の裳(も)を尻ばしょいにヒモでしばって歩いた」という。鍛埜の天野家では、数代前の奥さんが道根往還を駕籠に乗り、何本かの長持を連ねた花嫁行列で来たと伝えられる。



## ⑧ 傘松の碑

「傘松」。高さ5m、幹の直径1m、傘径15mほどの枝が、傘を広げたように出ていた大松の愛称で、当時の道根往還のシンボルだった。昭和10年以前の「尋常小学校国語読本 巻七・第五 傘松」に「村の西にくぬぎの林がある。それを通り抜けて、だらだら坂を上ると、道ばたに大きな松が一本ある。幹が二かゝへもあって、枝から傘を広げたように出ているので、村の人はかさ松と呼んでいる。」と記述されていた。



## ⑨ 岩戸の三弘法

「弘法大師」は、真言密教を中国からもたらした「空海」の諡号（しごう）である。能書家として知られ、嵯峨天皇、橘逸勢とともに「三筆」の一人に数えられている。「四国お遍路」を代表とする弘法大師の足跡を辿る巡礼は全国各地にある。「三河新四国」も、その一つである。この岩戸三弘法の由来は不明であるが、山の中の窪地にひっそりと祀られている。



## ⑩ 鍛埜の「スミヤ」天野家

鍛埜町の天野家は、岩戸城主の天野氏の支流で、土地の名族である。六代前の人が炭問屋を始めたので「スミヤ」という屋号を持つ。作手方面や近くの村から「スミヤ」に大量の木炭が運ばれ、一日に二百荷の炭が岡崎へ送られたという。二百荷というと、五貫目（18.75kg）入りの炭俵が四百俵（7.5t）となる。馬方は二俵（37.5kg）を背負い、馬には背の両側に二俵ずつと、鞍には三俵をつけ、合計九俵（168.75kg）を運ぶのが普通であった。一日一往復しかできないから、四百俵の炭を運ぶには四十五頭ほどの馬が必要となり、往復で、のべ九十頭ほどの馬が「道根往還」を通ったことになる。板田町の中山氏も炭問屋をやっていて、馬を数頭飼い、鍛埜の奥へ炭を買いに行ったという。鍛埜から岡崎へ、炭の他に米や繭なども馬で運び出した。米は二俵（120kg）を馬につけた。帰りは、日用品や頼まれた品を買って荷とした。こうしてみると、道根往還を一日に百頭前後の馬が通ったであろうことが分かる。



## ⑪ 天野家に移築された旧岡崎城門

この門は、かつて旧岡崎城裏門の北曲輪(きたくるわ)四脚門だった。明治6年(1873年)に城の取り壊し令が出て、岡崎城も取り壊されることになった折、この地域で炭問屋を手広く商っていた天野家が、それがしかのお金でこの門を買い取った。移築をするにあたり屋根瓦は新しくふき替えられた。また、木材部分には朱が塗られた。旧岡崎城をしのぶ、数少ない遺構の一つである。



※民家のため、くれぐれも無断で敷地内に入ったり、撮影をしたりしないようご注意ください。